



さがす

2022年 / 日本映画

配給：アスミック・エース / 123分

2022 (令和4) 年1月29日鑑賞

テアトル梅田

監督：片山慎三
 出演：佐藤二朗 / 伊東蒼 / 清水尋也 / 森田望智 / 石井正太郎 / 松岡依都美 / 成嶋瞳子 / 品川徹

👁️👁️ みどころ

ポン・ジュノ風？キム・ギドク風？パク・チャヌク風？私はそんな小見出しで片山慎三監督が自費製作した『岬の兄弟』（18年）を高く評価し、星5つを付けた。すると、彼の2作目にして完全オリジナル脚本による商業映画デビュー作たる本作への期待は大！

『さがす』という謎めいたタイトルどおりの導入部の展開は面白い。西成のあいりん地区なら、今でもあんなに気の強い中学生の女の子がいるかも・・・？そう思っていたが、3か月前の物語、13か月前の物語になってくるとアレレ、アレレ・・・。

冒頭に提示される300万円は懸賞金のはずだが、その実は？本作のネタは、“安楽死”に名を借りた連続凶悪殺人事件？そんな薄っぺらな物語が見えてくると・・・？

濱口竜介監督脚本のオリジナル性が際立つ『偶然と想像』（21年）はメチャ面白かったが、本作はまだまだ・・・。片山監督には、次の第3作目に期待！



◆片山慎三監督の『岬の兄弟』（18年）は、「ポン・ジュノ風？キム・ギドク風？パク・チャヌク風？」の小見出しで私が最大限誉め称えた、近年珍しい邦画界に風穴をあける問題提起作だった（『シネマ43』327頁）。同作は長編デビュー作ながら自主製作映画だったが、彼の長編第2作にして商業映画デビュー作になったのが、当然これも完全オリジナル脚本による本作だ。

「大阪に住む父親が指名手配犯を目撃したことがある」という片山監督の実体験をベースに本作の脚本を書き、オリジナルのストーリーをゼロから膨らませていったそう。舞台は大阪・西成のいわゆる“あいりん地区”。ストーリーは父親・原田智（佐藤二朗）が中学生の娘・楓（伊東蒼）に、「指名手配中の連続殺人犯見たんや」と言い出したところからはじまったが・・・。

◆『キネマ旬報』2月上旬号は「勝負の二作目、更に本領を發揮」等の見出しで本作を特集（48頁～57頁）しているから、本作は注目作。タイトル通り、本作は前述の言葉の翌日に失踪してしまった父親を娘が「さがす」ところから本格的ストーリーが展開してく。しかし、楓は意外に早く、簡単に原田智と名乗る男と再会するからアレレ・・・。

もともと、それは父親ではなく、同姓同名の若い男（清水尋也）だったから、アレレ、アレレ。父親は一体どこに？そして、この爪を噛む、どこもなく不気味な、原田智と名乗る若い男は一体何者？

◆こりや面白そう。そう思い、身を乗り出して観ていると、今どき珍しく気の強い中学生の女の子が一人で父親捜しをしていく面白いストーリーが中途半端なまま、いきなり“3ヶ月前”の別のストーリーに移ってしまうからアレレ・・・。

その主人公になるのが、介護施設で働いていた男、“名なし”こと山内照巳（清水尋也）。そこで、難病のALSに苦しみ、死ぬことを願っている智の妻・公子（成嶋瞳子）が登場してくることによって、智と山内との関係がすこしずつ明確に！しかし、何だ、これは？片山監督のオリジナル脚本もこの程度・・・？

◆そう思っていると、続いて物語は更に“13ヶ月前”に遡り、卓球場の経営をしながら妻・公子の看病に苦しんでいる智が登場する。そしてそこでは、安楽死を願う妻・公子を巡って智が次第に山内との関わりを深めていくストーリーが描かれる。なるほど、なるほど。つまり、本作は、第1部を現実の中学生の娘・楓の視点から、第2部を3ヶ月前の凶悪殺人犯（？）山内の視点から、そして第3部を“13ヶ月前”の父親・智の視点から描き、それを謎めいた「さがす」という統一タイトルで繋げたわけだ。

しかし、残念ながらラストに向かうにつれて、本作はストーリーの薄っぺらさが露呈していくことになる。つまり、本作のストーリーは“安楽死”をネタにした、連続凶悪殺人犯罪という実態が暴露されてしまうと、何だそれだけのお話し・・・？それが見えてくると、某島で起きるおどろおどろしい悲劇（？）も、智と山内の2人が自殺希望者をネットで募っている事業（犯罪？）であることが見えてくるから、かなりバカバカしい様相に・・・？

◆本作で智を演じた佐藤二朗を私は全然好きになれない俳優だが、中学生の娘・楓役を演じた伊東蒼は面白い。また、本作ラストに見る、かなり長時間にわたる卓球のラリー下での父娘間の語らいも興味深い。「原作もの」ばかりに頼った、テレビドラマまがいの、分かりやすい（バカバカしい？）邦画が増殖している昨今、本作のような完全オリジナル脚本は貴重。しかし、導入部での問題提起が面白いだけで、残念ながら本作の中盤からラストに向けてはからっきしダメ！ちなみに、『キネマ旬報』2月上旬号「REVIEW 日本映画

&外国映画」で井上淳一氏は星一つとし「これを褒める人は絶対いると思うし、そう勘違いさせる力はあるけど、こういう話をやる最低限の礼儀がない。酷い。」と酷評しているが、私の評価もこれに近い。

本作の賛否両論の評価をじっくり確認したうえで、片山監督の次の第3作に期待しよう。

2022（令和4）年2月4日記